

Title	〈翻刻〉『野郎仁勢物語』巻上 : 大坂歌舞伎の役者 資料として
Author(s)	浜田,泰彦
Citation	詞林. 2015, 58, p. 85-101
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/54446
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈翻刻〉 『野郎仁勢物語』 巻上

――大坂歌舞伎の役者資料として―

浜田 泰彦

『伊勢物語』のもじりとして

本稿で翻刻・紹介する『野郎仁勢物語』は、『仁勢物語』(作者未詳、寛文二〈一六二〉年刊。)・『好色伊勢物語』(作者未詳、寛文二〈一六六二〉年刊。)・『好色伊勢物語』(四発表された『伊勢物語』のもじり作品の一つとして知られている。『野郎仁勢物語』のもじり作品の一つとして知られている。『野郎仁勢物語』のもじり作品の一つとして知られている。『野郎仁勢物語』(以下、『野郎仁勢』と略記。)が、『伊勢物語』(本稿で翻刻・紹介する『野郎仁勢物語』は、『仁勢物語』(作本稿で翻刻・紹介する『野郎仁勢物語』は、『仁勢物語』(作本稿で翻刻・紹介する『野郎仁勢物語』は、『仁勢物語』(作本稿で翻刻・紹介する『野郎仁勢物語』は、『仁勢物語』(作本稿で翻刻・紹介する『野郎仁勢物語』は、『仁勢物語』(作本稿で翻刻・紹介する『野郎仁勢物語』(

にも行われた「秀句趣味」に端を発し、一六五〇年前後に至っ今榮蔵氏が指摘したように、室町時代を通じて広く一般庶民の出版が基盤となっていることはいうまでもない。さらには、語』の場合は、慶長の嵯峨本以来、古活字版・整版本の多数正世期の古典文学作品全般への関心の高まりは、『伊勢物

『野郎仁勢』のもじりは、『伊勢物語』本文のみならず、挿仁勢』を付置することもできるだろう。て高揚した「戯文学界におけるパロディ趣味」の中に『野郎

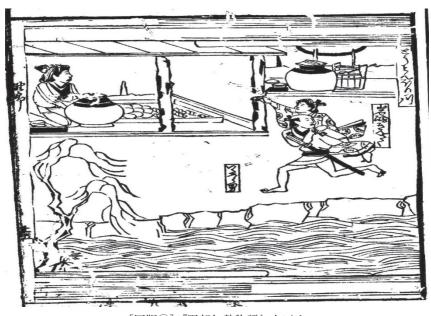
みな変更が加えられている。 とここ、「子叫(河)を裸足で逃走する図柄へと、巧の投」)の挿絵は、昔男(業平)が二条后を背負い、岸辺にの段」)の挿絵は、昔男(業平)が二条后を背負い、岸辺にの段」)の挿絵は、昔男(業平)が二条后を背負い、岸辺にかたまご」岩崎金作を背負い、裸足で逃走する図柄で、あまりがまでは昔男ならぬ「いたづら男」が、二条后を背負い、岸辺にかな変更が加えられている。

六段について摘記したい。 る部分もあるが、本文のもじりの具体相を明らかにするため、る部分もあるが、本文のもじりの具体相を明らかにするため、重複すすでに、信多氏による詳細な指摘がそなわるため、重複す

衆のたまご」であった岩崎金作を見そめた「いたづら男」が、『野郎仁勢』六段は、松本名左衛門方に抱えられていた「若

道頓堀川に盗み出し、逃走する物語がつづられている。

逃走



[図版①]『野郎仁勢物語』上五オ (大阪府立中之島図書館蔵本)

たづら男」は、代わりに餅代を支払ってくれる人を探し出し、 出された金作に、 なせ」と岩崎金作に餅代をせがむ。 しずりしてな」いた昔男に対し、「いたづら男」は、「おあし語彙を生かしつつ、巧みな転換がはかられている。この後、「あ れてしまった、という滑稽な場面に 作に対し、空腹を満たそうと購入した餅を金作に盗み食いさ 入した餅一箱が、湯漬を作るために湯を沸かす騒ぎの間に、えている。著名な「鬼一口」の場面も、「いたづら男」の購 雨もふりければ」とあるところを、「腹さへいといみじうなり、 を購入する。 中 ひもじになりければ」と、原作の雷雨を空腹の描写に書き替 金作にたいらげられてしまったと次のように書き替える。 取返し」た。『野郎仁勢』では、この行為を「それをかく 長年慕っていた二条后を鬼に奪われる昔男の悲劇を描く原 はや。 夕食前で空腹だった「いたづら男」 て、えきかざりけ はやゆもわきなむとおもひつゝいたりけるに、もちはや さはぎに。えきかざりけり。 ひとくちにくひにげり。 箱くいけり。まいるかといひけれど、 夜も明なんと。思ひつ、ゐたりけるに。 『伊勢物語』 金銭の持ち合わせなどあるはずもなく、「い では、「神さへいといみじうなり。 あなやと。いひけれど。神なる もとより、 『野郎仁勢』は、 は、 火をふくをとに 茶屋で一 暗い内に連れ (『伊勢物語』 『野郎仁勢』) 鬼はや。 原作の 箱の餅 母

親

の遺伝で、

「口もと」に容貌上の欠陥があったらし

61

くし」とあり、『野郎仁勢』の「かたちのいとうつくし」と

容に一致する。なお、『野郎虫』は次のように続けている。

のほとりにすこし申ぶんあれとも。

それはおふくろの

行なれば。いかゞはせん。

い。また、『野郎虫』(万治三年四月上旬刊)には、「面躰うつ

上記のほかにも、『野郎仁勢』の巧みな改変を指摘しうるが、りながら、岩崎金作の悪行を批難する内容に切り替えている。たのは藤原基経・国経兄弟であったと明かし、「それをかく。くひにげとはいふなり」と評する。原文の、二条后を奪取しくか。

二、大坂の役者の動向をうかがう資料として

掲げる翻刻本文を参考にされたい。

たいらげた―は、こうした評価を反映しているのかもしれなたがの役者である。万治三〈一六六○〉年~寛文三〈一六六大坂の役者である。万治三〈一六六〇〉年~寛文三〈一六六大坂の役者である。万治三〈一六八〇〉年~寛文三〈一六六世量、たされたり」とあり、粗忽な性格であったらしい。『野郎に勢』で、「いたづら男」への配慮を欠いた行動―餅一箱をためる。寛文三年仲夏日、勢陽後学如是亭我聞子による跋文である。寛文三年仲夏日、勢陽後学如是亭我聞子による跋文である。寛文三年仲夏日、熱陽後学如是亭我聞子による跋文である。寛文三〈一六六〇〉年~寛文三〈一六六〇〉年~寛文三〈一六六〇〉年~寛文三〈一六六〇〉年~『野郎に勢』六段に登場する岩崎金作は、実在したさいらげた―は、こうした評価を反映しているのかもしれなった。「いった」といるのかもしれないらげた―は、こうした評価を反映しているのかもしれないらげた―は、こうした評価を反映しているのかもしれないらげた―は、こうした評価を反映しているのかもしれないの役者である。

いうわけである。 な役者であったと伝える唯一の資料が『野郎仁勢』であるとな役者であったと伝える唯一の資料が『野郎仁勢』であるとに直接関連するわけではあるまい。すなわち、金作が大食漢一方、『野郎仁勢』の金作は、大食漢であったが、この評価

はない。『野郎仁勢』六段により新たに判明する事実はこれだけで

「是は松本名左衛門兼治卿の御内に、太夫にて居たまひけ 「是は松本名左衛門は、寛永六〈一六二元〉年、町奉行所への願出 やに伴い、大坂浜側にて若衆歌舞伎興行に携わった名主の一 人である。承応元〈一六五二〉年七月、今度は若衆歌舞伎禁 や本名左衛門は、寛永六〈一六二九〉年十月の女歌舞伎禁 が叶い、再度、野郎歌舞伎の興行主として活動し始めた。 が叶い、再度、野郎歌舞伎の興行主として活動し始めた。

卿」なる仰々しい表記である。
あう一つ注目すべきは、先に引用した「松本名左衛門兼治郎虫』が刊行された万治三年以前の事跡であるらしい。郎虫』が刊行された万治三年以前の事跡であるらしい。『野郎仁勢』では、金作がこの名左衛門に抱えられていた

演目の狂言尽が催されたと伝える(「室町殿興行故事」)。名左足利義輝が室町殿において、「義経記」・「曽我の仇討」の二七六二〉年正月刊)巻之一に、永禄二〈一五五九〉年、将軍七六二〉年正月刊)巻次一蝶『歌舞伎事始』(宝暦二二〈一

7 における「兼治卿」なる敬称も、 門は、 室町家御扶持人松本名左衛門忰久左衛門一子」 義経記」で僧正坊役を務めたという。 の「狂言尽名代」六名の中に、 名左衛門も名を連 その 『野郎仁勢』 (傍点、 縁 あ 0

かもしれない。しかしながら、 「室町家御扶持人」にふさわしい称号として与えられた 浄瑠璃太夫の受領名のごと 右記の狂言尽は、 当時 の記

巻之一「歌舞伎来由」・「物真似狂言尽濫觴」・「 信 の三項が、 のおけるものではない。広瀬千紗子氏は、 黒川道祐『雍州府志』(貞享三〈一六八六〉 歌舞伎芝居来 歌舞伎事始 年

すことができない。したがって、『歌舞伎事始』

(『言継卿記』・『お湯殿上の日記』等) に、

切記事を見

出

もっとも、岩崎金作が大食漢であ

ったとの

描写も

含め、

の記事は、

録

類

事 治卿」 摘する。奉行所に歌舞伎興行の赦免を受けた特権は、正しいぞ有ける」(「歌舞伎来由」)一事を証明することにあったと指 的を歌舞伎役者が「貴人高位の御膝辺までも参りたる事にて九月刊)等の古地誌によって記事が構成されており、その目 由緒が裏支えしていると示したい松本名左衛門もまた、 と自 「同書は俗書なれば信じ難し」(伊原敏郎 称ないし公称してい たのかもしれない。 歌 氏 と断 舞伎 兼

体が、

とする可能性があることも否定できないのではない

おける敬称をもとに

描

1

IJ]

野郎仁勢』

において、

座主が正し

r V

由緒を示す

か。

とも

0

ずるのは妥当とも思わ

れるが、

室町殿御前の

狂言尽の記事自 たストー

> ると、 あり、 を有り 禄二年に御前 あるはずであ 0, 仮に、 後者は前者 承応三年に野郎歌舞伎の赦免を受けた名左衛門と、 敬称を名乗った例を残していることは注 歌舞伎事 狂言に来演した名左衛門は、 の先々代か、 始 の記事が事実に基 少なくとも先代の名左衛門で 百年弱 盲 7 0) 隔たりが いるとす されてよ

りえている側面も看過すべきではないと考える。 若衆歌舞伎時代~ 勢物語』 郎仁勢』が記載した内容のすべてが事実なわけでは い。そうした留保を含むにせよ、 れた操作であって、 本文に対する逐音のもじりを維持 野郎歌舞伎草創期を記録 虚飾が含まれている可 本作品は した貴重な資料た 現存資料 能性も排除 するため なく、 に加えら の少ない、 できな

野 郎仁勢物 語 0 `資料: 的

大坂の 貴重な資料として読まれ く寛文頃〈一六六一~七三〉 についても、 しての側 間 先述 先の六段の例に見た通り、 0 |座主塩| 色恋沙汰を内容の中心とする。 0 面がもっぱら注目されてきた。その巧みな利用方法 通 り、 屋の 十分な検討が加えられた一方で、 野 郎仁 おどり子」を「しゆんだ男」 ることはあまりなかったようである。 は、 の大坂の役者の 本作は、 伊勢物 年若い たとえば、 若衆と贔屓客と 動向を把握する 0) 本 もじり作品と がそその 十二段は、 書 が

しづまが、

西鶴が伝えるように人気を集めた若衆であったこ

上記のごとき意義に鑑み、

以下に『野郎仁勢』

巻上全文の

に登場する本作では、必然的に松本名左衛門とおなじく大坂に登場する本作では、必然的に松本名左衛門とおなじく大坂家門」を参照されたい。塩屋九左衛門・塩屋九郎右衛門は、『歌素付事始』にも名を連ねる狂言名代である。ただし、二十三群伎事始』にも名を連ねる狂言名代である。ただし、二十三段に登場する井筒屋久兵衛は、役者評判記類に名が見られない抱主である。舞台経験が少ないか、ほとんどない若衆が頻繁す話である。舞台経験が少ないか、ほとんどない若衆が頻繁す話である。

年正月刊)「命乞ひは三津寺の八幡」(巻五ノ二)に、を指すと思われる。井原西鶴『男色大鑑』(貞享四〈一六八七〉五二〜五五〉に活躍したとされる若衆、平井しづま(静馬)八段・三十九段に登場する「しづま」は、承応年間〈一六

せしは、末代にもあるまじき美児なり。塩屋九郎右衛門に見し、岩井歌之介・平井しづまなど申

とんど判明しておらず、 記載との齟齬が認められる。従来、平井しづまの経歴は、 三十九段では、塩屋九左衛門が抱え主と記載があり、 まの葬礼には、 十九段は、しづまの死亡記事であることが注目される。 いずれも否。)については、判然としない。それは措いて、 れた簡易な駕籠に乗って駆け付け、盛大に催されたと伝える。 と、絶世の美少年として回想された若衆である。『野郎仁 多くの衆道者が 両作のいずれかの可否 「箯輿」と呼ばれる竹で編ま (あるい 西 しづ 鶴 は 勢 ほ 0

> 時期を絞り込めるだろう。 時期を絞り込めるだろう。 時期を絞り込めるだろう。 時期を絞り込めるだろう。 時期を絞り込めるだろう。 時期を絞り込めるだろう。 に書かれたものと特定できる。 では、『野郎仁勢』の成立時期は、寛文頃であったとされた役者評判記(『野郎虫』・『剥野老』・『赤烏帽子』等)に集された役者評判記(『野郎仁勢』の成立時期は、寛文頃であったとされた役者評判記(『野郎仁勢』の成立時期は、寛文頃であったといえる。そして、本作がまぎれもなとを伝える記事であるといえる。そして、本作がまぎれもなとを伝える記事であるといえる。そして、本作がまぎれもなとを伝える記事であるといえる。そして、本作がまぎれもな

これまで翻刻がそなわっていなかったのも、このことが原因『伊勢物語』をもじった作品としてよく知られているものの、困難にしている。加えて、冒頭で述べた通り、『野郎仁勢』は、奥付が存したであろう巻下を欠くために、成立時期の特定を属天理図書館蔵本)は、いずれも巻上のみの零本で、刊記・

そもそも、現存本(大阪府立中野署真図書館蔵本・天理

になっていると考えられる。

なお、すでに指摘のあるように、『男色哥書羽織』(作者未詳翻刻を掲げることとした次第である。

所は、「岩崎金作」→「山本辰弥」、松本名左衛門の削除等でた六段の「男色伊勢物語」本文を掲げておく。主要な変更箇た六段の「男色伊勢物語」ない限り、推定は推定にとど定する。巻下の所在が確認されない限り、推定は推定にとど定する。巻下の所在が確認されない限り、推定は推定にとど定する。巻下の所在が確認されない限り、推定は推定にとどまらざるをえない(巻中の存在も否定できない)。本稿では、野間光辰氏は、「下巻は全部十五段を収めていたらしい」と推聞光辰氏は、「下巻は全部十五段を収めていたらしい」と推問光辰氏は、「下巻は全部十五段を収めていたらしい」と推問光辰氏は、「岩崎金作」→「山本辰弥」、松本名左衛門の削除等でた六段の「男色伊勢物語」本文を掲げておく。主要な変更箇た六段の「男色伊勢物語」本文を掲げておく。主要な変更箇た六段の「男色伊勢物語」本文を掲げておく。主要な変更箇た六段の「男色伊勢物語」本文を掲げておく。主要な変更

と。火ふく音」(五ウ)にて。ゑき□□たりけり。やうと。火ふく音」(五寸)にて。ゑき□□たりけり。やうと。火ふく音」(五寸)にて。ゑき□□たりける。とこければ。がある所ともしらず腹さへいま、にて。夜も更ければ。がある所ともしらず腹さへいま、にて。夜も更ければ。がある所ともしらず腹さへいま、にて。夜も更ければ。がある所ともしらず腹さへいま、にて。夜も更ければ。がある所ともしらず腹さへいま、にて。夜も更ければ。がある所ともしらず腹さへいたりはる。でもしになりければ。かの茶やの。あばらなるおく座敷に。若衆を置て。おとこ。湯漬なりとせんと。釜のまへにをり。はや湯もわきなんとおもひつ、いたりけるに。餅はや。一箱喰けり。御名は、山本辰弥と云、大変へむかしいたづら男有けり。御名は、山本辰弥と云、大変へむかしいたづら男有けり。御名は、山本辰弥と云、大変へむかしいたづら男有けり。御名は、山本辰弥と云、大変へしいたりける。やう

しら糸かなにそと人のといし時のしなせと。せむれど甲斐なし。(一夜も朝ゆくに。見れば。みせ成。しんこもなし。

(1) ラウラ・モレッティ「近世初期・前期の散文文学における『伊勢物語』の書き直し・パロディおよび新展開」(山本登朗・ジョッカー、「近世文学と『伊勢物語』→『伊勢物語』のもじりと「別の大学への浸透→」(山本登朗・ジョッカー)の書き直し・パロディおよび新展開」(山本登朗・ジョッカー)の書き直し・パロディおよび新展開」(山本登朗・ジョッカー)の書き直し・パロディおよび新展開」(山本登朗・ジョッカー)の書き直し・パロディが表演を表演している。

勢物語』―『伊勢物語』のもじりと通俗的文学への浸透―」では、物語』六段と『野郎仁勢』本文との比較が、(1)「近世文学と『伊め語絵 絵と文 文と絵』―九九五年・平凡社)では、『伊勢(2) 信多純―「にせ物語絵 『伊勢物語』近世的享受の一面」(『に

九九六年・小学館)による。

なお、岩井歌之介(雅楽介)も、

..七段との比較がそれぞれ行われている。

- 3 期俳諧から芭蕉時代へ』二〇〇二年・笠間書院 今榮蔵「パロディの世紀―十七世紀日本文学の一 側面— -」(『初
- $\widehat{4}$ 注(2)に同じ。
- 5 林舎、所収)による。以下、 文庫蔵)影印(山本登朗編 『伊勢物語』の引用は、 『伊勢物語版本集成』二〇一一年・竹 明暦元 同様。 (一六五五) 年刊本(鉄 心斎
- 6 による。 引用は、『歌舞伎評判記集成』 第1巻 (一九七二年・岩波書店)
- 7 引用は、 6 同書による。
- 8 伊原敏郎『歌舞伎年表』第一巻(一九五六年・岩波書店) 参
- (9) 引用は、宗政五十緒・柳瀬万里校注 『日本庶民文化史料集成』 第六巻(一九七三年・三一書房)による。
- 10 (『京古本や往来』第26号、一九八四年十月十五日) 広瀬千紗子「歌舞伎通史の形成―『歌舞伎事始』の場合―(二)」
- 11 注 (8) 同書。
- 12 引用は、 小篠久兵衛(『野郎虫』)とあるいは、 暉峻康隆校注·訳『新編日本古典文学全集』67 同一人物 $\widehat{}$
- 郎仁勢』二十一段に登場する。 注(8)同書で伊原氏は、『男色大鑑』の記事を引用
- ぬという展開が、 が死没する内容である。 来事に設定した根拠に乏しい。また、『男色大鑑』でも、 づまの没年を「貞享の初め」と推定しているが、西鶴が近年の出 実説の摂取とするには少々無理があろう。 堺の金持の老人の実息の回復を願って死 しづま L

- <u>16</u> は十分ではない」、「フィクションでありながら、ノン・フィクショ のパロディーに限定したり、役者評判記の一例として見るだけで の書き直し・パロディおよび新展開」において、モレッティ氏も、 **例えば『野郎仁勢物語』の特色を理解するためには、『伊勢物語** 注(1)「近世初期・前期の散文文学における『伊勢物
- 17 中央公論社 野間光辰「改題本のはなし」(『近世作家伝攷』一九八五年

ン的な実用性の強い書物である」と述べる。

- 18 注 (17) 論文。
- (1) 引用は、天理大学附属天理図書館蔵本 **/6)によった。なお、巻六は乱丁が多く、** (913·62/イ7 該当箇所も適宜校訂

した。

誌事項を以下に掲げる。 翻 刻底本とした大阪府立中之島図書館蔵本 軍 和

表紙

(書誌)

野

書型 五糎 大本一卷一冊 卍繋ぎ (紗綾形 (替表紙)。 桐花文様紺色地。二六·三×一七

 $\exists \cdot$

題簽

後補題簽無枠

「野郎似勢物語」(墨書)。 一七・八×

版心

野郎 上卅二 (~卅五)」 上一(~十九、廾)」、「やらう 上廾一」、「野

0) 書

句読

極少。上十四オに「。」が、一箇所見えるのみ。 全二五丁 (遊紙〇)。

四周単辺、二一・三×一 半丁十一行。

• 糎

白描(吉田半兵衛風) Ŧi.

不明。 大坂の役者事情に精通した人物だと思われる。

凡例 (翻刻本文)

漢字は、原則として通行の字体を用いた。

清濁は、底本に従った。

丁移りは、(」(上一才))のように示した。

狂歌は二字下げで表記した。

文が見られない場合は、その旨注記した。 『伊勢物語』の該当段数を示し、『野郎仁勢』 に該当する本

判読困難な箇所は、「□」で示し、[] に推定される読みを 補った。また、天理大学附属天理図書館蔵本(913・6 /イ265/23)によって補った箇所がある。

野郎 仁勢物語卷上

入けり。 ぬかり男野良頭巾きて、●第一段 その内に、 いとなまめひたる太夫ありけり。 難波の京、 かぶき芝居にしる人有て おもほ

> かねをかけ、歌をそへてやる。その男からかわの巾着をな 心地まどひにけり。おのこのきたるやうなかたひらはやらで、 えずふるき舞台にはしり出、いとおもしろくおどりければ、

んさげたりける。 かぶきぐるひ我まゝにしてすりきるは

となむ又二良をしていひやりける。たんとお□」(上一才)し しのぶかたへとかねをやるにぞ

ろきこと、もやおもひけん。

となんいきのわるき心ばへなり。 みちのくの忍ぶおのごのわれゆへに みたれそめてもかねなりならぬ かぶき子は、

挿絵」(上二オ) きよくをやいひやる。」(上一ウ)

いか、おもひけん。時は弥生の朔日、伽羅そとはかりやりけあらざりけらし。それをかのしわき男うそうちかたりて、 人かたちより御心中なんまさりたりける。知音ひとりのみも のおどり子よのきりあひ人形よりはまさりたりける。その ざる時、そのうちに中川長太夫といふなる若衆ありける。そ しわき男ありけり。よの芝居ははて、かぶきにはまだ人の出

かくいらむさ

ひとえ物と云物をやるとて、 「男ありけり。松嶋作之丞といふ若衆のもと」(上二ウ) へ

おもひあれば作のぢやうもん付てやる

ひとへ物には縫をしついも

火などたいておはしましける時の事也九郎右衛門、子とものまだ芝居へも出 へも出給はで、うちに茶釜の

第四段

らず。 ありける。又の日の芝居に、みめのよき若衆に小補はやらで、きやうもあらざりければ、猶恋しとおもひつ、なん」(上三才)外に出られにけり。すりきり給ふ人なれば、茶屋へよび入べ 大坂 だましてみ、焼てみ、ほめてみられば、うそににるべくもあ ける人、ゆき物かたりしけるを 狂言はつる斗のほどに、 人ありて、それをほれたにてはあらで、心ざしのふできなり 南みの堀に六三良おはしましける。 打わらひて、あばらなる茶屋に月のかたふくまで、ふ 西のさんじきに見る

家やあらぬかねやむかしのことならん わか身ひとつはもとでだになし

せりてうそを思ひいで、よめる。

とよみて、夜のほ ので~と明るに、なく~~かへりにけり。

第五段

14 X としのびていきけり。 め こしのびていきけり。味噌つく夜なれば、かどより男有けり。みむなみの堀ばたわたりの花崎! かどよりもえい 小太夫を

> て、みせの際に武左衛門を置てまもらせけれる知音の君にはあらねと、心中づくなれば、 らで、はしとみあけたるみせのきは」(上三ウ)よりかよひけ れば、 九左衛門き、付 いけどもえ

あはでかへりにけり。さて、 人しれぬ我かり初のやくそくは よめる。

よひく~ことにくちもすはなん

九左衛門ゆるしてげり。

親方どのゝまもらせ給ふけるとそ。」(上四才)
紫紫紫のやらう銭ださずに毎夜あひけるをよのつねのぞむなればとよめりければ、いとおかしがりて、九左衛門ゆるしてげり

おく座敷に若衆をば置て、男ゆづけなりとせんとかまの前腹さへいといみじうなり、ひもじになりければ、あばらなるできる。にて夜もふけければ、もちある所ともしらず、とに出しける餅を、かれはなにぞとなん男にといける。屋に出しける餅を、かれはなにぞとなん男にといける。 いとくらきに来けり。道頓堀川といふ河を辿っ行ければ、茶年をへておもひわたりけるが、かねださずしてぬすみ出して、むかしいたづら男有けり。御名は岩崎金作といひけるを、むかしいたづら男有けり。御名は岩崎金 はや一箱くいけり。まいるかといひけれど、火をふくをとににをり、はやゆもわきなむとおもひつゝいたりけるに、もち 御名は岩崎金作とい

挿絵」(上五才)

て、えきかざりけり。」(上四ウ)

おあしなせとせむれど、 やうく、夜もあけゆくに、 かひなし。 みれば、 みせなるしんこもなし。

しら糸かなにぞと人のとひし時

銭いださざりける人なるを聞付て、とゞめて取返したまふてだあへずして 侍 しをまいりたまひ、いかにしてもかはりのだあへずして 大食にて、道頓堀川の大仏餅しんこ、あづきの大納言、またようで、近崎堀川の大仏餅しんこ、あづきの大納言、まかたちのいとうつくしかりければ、盗みて出たりけるを、御とは松本名左衛門兼治卿の御内に、太夫にて居たまひけるを、 もちとこたへてかはまし物を

衆のたまごにて、金作の親の所におはしけるときとかや。げり。それをかくくひにげとはいふなり。」(上五ウ)まだ若 ●第七段

当世男ありけり。ちゐんの若衆にあかれわびて、しつまを のいとしろくぬりたるをこぼつをみて、 いけるに、かねをはりのあげくに、家きりうりにうりて、

いとゞしくうりたる家の恋しきに 浦賀山紫 しくもかやる人かな

となんよめるは、 むかしのことゝ なり。

きて、くぜつもとむとて、友とする」(上六才)人ひとりもな うつけ男ありけり。宿や住うかりけん。しづま殿のかたにい ふして、行けり。品之介にあひけり。けふこゝにきたをみて、 しらするなしづまにあひにきたことを 第八段

おかやる人やきかばとがめむ

とよめるもいにしへの事となり。

しといひけるは、水ゆく河のくもでなれば、橋をよつわたせそよつばしといふが、にいたりぬ。そこを」(上六ウ)よつば りなる茶やの腰かけにやすみゐて、こはいひくいけり。其茶 のいはく、やきたうふといふ五もしを旬のかみにすへて、む やにやきだうふいとおもしろく焼たり。それをみて、ある人 り。若衆づるにぎる人もなくてまどひいきけり。よこ堀のす にとていきけり。本より友とする人ひとりふたりにていきけなして、北浜辺にはあらじ。道頓堀にすむべき若衆。求めなして、北浜辺にはあらじ。近点はほかできる大きのです。 やつこ男有けり。そのおとこ身をやうきなるものにおもひ

まき心をよめといひければ、よめる。

びけり。」(上七才) とよめりければ、皆人こはいひのうへによだれをたれてほと やきたうふきつくくうべいたんとだせ うらばくうへいふつとくいきれ

挿絵」(上七ウ)

上松小ざらし殿の参り給ふとおもふに、ちゐん衆逢たり。か、 にて柴垣を三味ひかせてうつ。
る所にはいりて、いまするとみれは、 らんとする寺はいとくろうせばきにだてなる紋所付て、 ゆきくて、新清水の辺にいたりぬ。天王寺にいたりて、 しる人なり。馳走ぶり

しはがきはうつの山辺のうつゝにも

ひらをきて、あそびゐけり。茶台山を見れば、五月の晦日、千之丞いとふるべるしちかた茶台山を見れば、五月の晦日、千之丞いとふるべるしちかた夢にもいまだきかぬなりけり」(上八才)

いきしらぬ千之丞とのいつとてか

その千之丞、物にたとへは、年比ははたちはかりにもたらぬその千之丞、物にたとへは、年比ははたちはかりにもたらぬといと大なる河あり。それを道頓堀川といふ。其河のほとりにいと大なる河あり。それを道頓堀川といふ。其河のほとりにはとして、猶ぞ。こあけの与介あんだをかきて来て、はやのとわびあへるに、こあけの与介あんだをかきて来て、はやのとわびあへるに、こあけの与介あんだをかきて来て、はやのとわびあへるに、こあけの与介あんだをかきて来て、はやのとわびあへるに、こあけの与介あんだをかきて来て、はやのとわびあへるに、こあけの与介あんだをかきて来て、はやのとわびあへるに、こあけの与介あんだをかきて来て、はやのとわびあへるに、こあけの与介あんだをかきて来て、はやのとれ」(上八ウ)芝居もはてぬといふに、乗りて我やに帰らんとすれば、皆人物笑ひして、大坂に借銭おふたる人なきにもない。 十六ばかりのおほきさ、水のこゑの市之丞あそびにきつ、、たいこのやくしやにとひけれは、これなん市之丞とのといふに、「ない」といる。

名にしおはゞいちのじやうずに舞給へ

とよめりければ、座敷こけまはりて笑」(上九才)ひにけり。わがのむ酒はありやなしやと

ばか男、むざ~~と家までうりまどひありきけり。さて父は●第十段

ける。住所なむ道頓堀の橋の辺也ける。やかして、金たんとやりける。此白銀をもたしておこせたりやかして、金たんとやりける。火はなくなりて、母なむあだこ、ろひやうきんになりける。父はなくなりて、母なむあだかせぎがせんといひけるを、母なんあだやかしたる人にて、かせぎがせんといひけるを、母なんあだやかしたる人にて、

いつまてとたのむのかねのひたへりを

君がかたにはあるとおもはむ

若衆かへし、」(上九ウ)

わかかたに夜ひるとなくほしければ

となん人をむさぼりても猶、かゝる欲なんやまざりける。
たのむのかねをいつかわすれぬ

(●第十一段→該当本文なし。)

●第十二段

本日山引つれてける尋ぬれば なし、出てゆく程に、いたづらものなれば、一心寺の六兵衛 なしとらへられにけり。若衆は松原の中にをきて、にげに どもにとらへられにけり。若衆は松原の中にをきて、にげに です。若衆うちわらひて、 本とす。若衆うちわらひて、 本とす。若衆うちわらひて、 本とす。若衆うちわらひて、 本の大兵衛

挿絵」(上十ウ)

とうかりけるをき、て、若衆をとりて、ともにいでゐにけり。

妻もにげゝり我もかくれり」(上十才)

むかしさかいなるおとこ、寺田左伝次といふなる若衆のもと●第十三段

きに、きるものをやれば、をしくきせねば、くるしと書て上がに、きるものをやれば、をしくきせねば、くるしと書て上が

むさけれどさすがにかけて此小袖

とればいふとらねばうらむ此小袖とあるをみて、たまはりがたき心地しける。

かゝるおりにや人はきぬらん

●第十四段

なかく~に恋しとおもふ巾着をぜに、おもひつける心なんありける。さてかの虎之介、「一才)なる虎之介、京屋の人は物くれそふにやおぼえけん。かか男みむなみの堀に気ま、にゆきたりける。そこ」(上十

きんちやくやりけり。よくふかく見えにければ、虎の介、歌さへぞくまでなりける。さすがにあはれとやおもひけん。歌さへぞくまでなりける。さすがにあばれとやおもひけん。

へるに、男京屋へなむかへるとて、」(上十一ウ)まだ気に入て銭をとらばや夜もあけば巾着さげてくださごじゆ

とい

我すむ宿にいざといはましとらのすけ兄もこひしき若なれば

あやしう、酒の上にて有べき野郎どもあらそひみえければ、うへ寺町は、みちの遠きに、堀の人の物見にかよひけるに、

第十五段

寺町に忍びてかよふ道なれど

やらうかぎりなく目みだしておどせど、酒盛のうへにて、酔い人のけんくわのはてもみるべく

●第十六段

心をみてはいかゞはせむな。

の事なれ。さらばく、今はとて別れしをぜひなく、いさ、かの事なれ。さらばく、今はとて別れしをぜひなく、いさ、かれらは、うつろひにければ、よのつねの人のよふにもあらず。せて、尋常の子どものやうにもあらず。年比あひ馴たる男、せて、尋常の子どものやうにもあらず。年比あひ馴たる男、せて、尋常の子どものやうにもあらず。年比あひ馴たる男、せて、尋常の子どものやうにもあらず。年比あひ馴たる男、せて、尋常の子どものやうにもあらず。年比あひ馴たる男、せて、尋常の子どものやうにもあらず。年出ありまで、おいらは、本の名人によれいかし、松本名左衛門といふ人ありけり。みる人ごとにほれゆかし、松本名左衛門といふ人ありけり。みる人ごとにほれゆかし、松本名左衛門といふ人ありけり。みる人ごとにほれ

挿絵」(上十三オ)

なる契り無念やとかきておくに、」(上十二ウ)

手をくだきあひみし人はよ所にのみ

かのじといふてよるはねにけり

かくいひやりたりければ、年月を若衆ぐるひてへにければ幾度や君が恨みきぬらんを達されをみて、いきはりかたじゆけなひとてよめる。

是や此あさぎの小袖くれしこそかくいひやりたりければ、

うれしさのあまりて、 過分に存じたてまつりけれ

や来る露のなさけとおもふまに」(上十三ウ) あさぎの小袖きるにぞ有ける

第十七段

竹長主水、竹長主水、独言の最中にきたりければ、此比をとづれざりける君の、狂言の最中にきたりければ、此比をとづれざりける書 あだなれと見るこそきたれ花おどり

ねずみ戸あけて人もまちけり

けふこずはあすは衣装もふりなまし きせずありともはむなりとみましや

て居給へる人となり。

●第十八段

きくとなま心有かぶき子有けり。此野郎の小歌きかむとて、ちくとなま心有かぶき子有けり。此野郎の小歌きかむとて、 る。」(上十四才) 菊をまきゑにしたる提重のさかなをとり、たいこのもとへや

切目に塩をふるかともみゆくれなゐににたるはいづら伊勢海老の

ゐににたるが上のいせゑびは

たいこしらずよみによみけ

いける人のしたるとも見ゆ」(上十四ウ)

挿絵 (上十五才) 第十九段

る。

りたりける、ほどもなく作松にあはせけり。景よき座敷なれ役者男、文づかへしける山田七郎右衛門といふ人をあひし ば、作松目にもおもしろくみゆる物から、 かねあるものとも

あま雲のよそにも人をなしゆくは

さすがにひんなみゆるものから

おもひたらず。作松、

いひける。此さく松は、四条川原よりくだりて、いとしのびとよめりければ、はやいとしく成たる人となん」(上十五ウ) 雨雲のよ所にのみしてふる人にとよめりければ、七郎右衛門返し、 わがゐる宿のかねをみせたや

ひにけり。扨、程へて、芸する人成ければ、帰りぬる道にて、血気男、舞台にゐける伊藤虎の介殿を見て、桟敷へよびてあばる帰れば、また。 ●第二十段 くおもひて、とらのすけのもとに道よりかねやる。 ちらとばかりかいでのやうなる御手をにぎり、いとおもしろ

君がためたをれる身とはしりながら

とてやりたりければ、 返事は其ま、仕らてなんもてきたりけ かねこそ人のほれぐすりなれ

つのまにうつけの心つきぬらん

君がやどにはかねもなからじ」(上十六才)

挿絵](上十六ウ)

ひかはして、こと心有けむ。いさゝか岩井雅楽介におもひつむかし、あだなる男玉之丞といふ若衆といとかしこくおものがは、の第二十一段 きて、玉之丞をうしと思ひて、その宿を出ていなんと思ひて、

かゝる歌をなんよみて、物にかきつけゝる。

とよみ置て出ていにけり。玉之丞かく書をきたるをはやく心岩よみでいなば心かはるといひやせん出ていなば心かはるといひやせん

といたうなきて、いづかたに求めゆかんと門に出、跡見、さ 覚えざりければ、帰り入て、 きみ、日本橋」(上十七才)まてみれど、いづこをはかり共、 かはるへき事ともおほしぬを岩井にほれて、かくあらんとい

銭かねもなき身なりけりこの比は

あだに契りて我やふられし

といひてなげきけり。

かねもちとおもひやすらん玉之丞

此君いとさびしくありて、かいてなきにやありけん。いひお やきでのことばいとゞ見えつゝ

今はとてふきこみ給ふかねをだに

人の心にわすれずもかな」(上十七ウ)

返し、

忘れ草こなたにはへぬ物ならば いかで岩井のしりもしなまし

またくく、あらうたてやといひて、男、

わすれなんと思へば今につなぎやる

あまりによはき心かなしも

かへし、

わがかたにたちいる人のあともなく

といひやれど、男思ひきりたれば、うとくなりにけり。」(上 いはゐすきとそなりにけるかな

十八才)

挿絵」(上十八ウ) 第二十二段

むかし、

かたへ、

たをれながらあずまをえしも忘れねば

身を恨みつゝ あずま

かねぞ恋しき

逢見ては小袖ひとつを本町のといへりければ、さればよといひて、

といひければ、その夜かへりにけり。いにしへいくさきのこ しちもながれてたえじとぞおもふ

とともなんくやみて、

秋の夜に小袖ひとつもなかりけり

しちもうけてやきる時のあらん」(上十九才)

— 98

秋のよにひとへの衣のなかりせば

にしへよりもあはれにてなん暮しける。 さむさあまりて人やなくらん

第二十三段

此おやかたを恨みつゝ、おやかた詫言すれ共、きかでなん有に行て遊びける。親かたは此子どもをこそねめ給ふ。役者は、に行て遊びける。親かたしかりければ、子共役者も腹たてか此頃、いなかわたらひしける役者の子共、井筒屋久兵衛もと此頃、いなかわたらひしける役者の子共、井筒屋久兵衛もと ける。さて、となりなるおとこわびことに出てかくなん、 筒井つゝゐつゝやがもとのいさかいは

過にけらしな我見ざるまに」(上十九ウ)

返し、

くらべこしふりあげ棒もかたすぎぬ

ねなくであらんやはとて、河内国へたばこきりになりて、行程に、かいてかねなくたよりなくなるまゝに、もはやかふかなどいひ~~て、つゐに両方こらえにけり。扨、年比ふるなどいひ~~て、つゐに両方こらえにけり。扨、年比ふる

もの芝居よりいぬるを見れば、此子共いとよく見しりて、」(上 あらんとおもひうらめしくて、雪隠の中にかくれゐて、子ど する、事なくて出にければ、いまに恋心有て、か、るにや かよふ所いできにけり。さりけれど、此もとの若衆の事わ

廾才)

|挿絵|| (上井ウ)

かねふけばよそにうき名もたつた山

とよみけるをき、て、かきりなくかなしと思ひて、堀へもゆ よるのねざめやひとりくゆらん

にもつくりけれ。今はすりきりて、よのうつけものになりけ るとき、て、いよく~ゆかず成にけり。かの子どもせんばの かず成にけり。まれ~~かの堀に来てみれば、はじめこそ心

かたをみやりて、

借銭をたんとをふらん此人の ひんなかくしそわれはふるとも

(●第二十四~三十二段→該当本文なし。)

きてもはやこまじとおもへるけしきなれば、おとこ、 むかし男塩屋の初太夫にかよひける。初此たび」(上井一才)

あしべよりみちくるなりや初塩の

君に心はおもひますかな

返し、

かぶき子の事にては、よしやあしや。

やれはあふやらねはあはず金はなしむかしおとこつれなかりけるかぶき子のもとに、 第三十四段

心ひとつになげくころかな」(上卅一ウ)

をもなくていへるなるへし。

(●第三十五段→該当本文なし。)

●第三十六段

谷せはみまへまではゆる尻ひげをむかし若衆のとし過なめりととひごとしける男のもとへ、

三十七・三十八段→該当本文なし。) ぬかんと人のわれおもはなくに

●第三十七・三十八段→該当本文なし。)

●第三十九段

かし九左がかぶきと申かぶきおはしましけり。其九左かおむかし九左がかぶきと申かまそかりけり。其子うせ給ふて、おほんだびする夜、其友だちなりける若衆、葬礼みんとてあんだにのりて出たりける。いとひさしく待はんべれば、うちなきてかみぬべかりけるあひだに、大坂の衆道者みなとや』(上井やみぬべかりけるあひだに、大坂の衆道者みなとや』(上井やみぬべかりけるあひだに、大坂の衆道者みなとや』(上井やみぬべかりけるあひだに、大坂の衆道者みなとや』(上井やみぬべかりけるあひだに、大坂の衆道者みなとや』(上井やみぬべかりけるあひだに、大坂の衆道者みなとや』(上井やみぬべかりけるあひだに、大坂の東道者の東京といるといることがよる。 はり子しづまと申かぶきおはしましけり。其九左かおむかし九左がかぶきと申かぶきおはしましけり。其九左かおもかし九左がかぶきと申かぶきおはしましけり。其九左かおもかし九左がかいませいました。

友だちどものなくこゑをきけていなばかぎりなるべみ時もとき

いとあはれなくぞきこゆる友だちをのいてき、返し、

てやる。

か

大坂の衆道者の歌にては、猶ぞありける。」(上井二ウ)

つる物とはわれはしらすな

いてき、した町の荘司いせみこのをい。挿絵」(上廾三才)

(●第四十~四十三段→該当本文なし。)

●第四十四段

ま、げいする。かのおとこ、歌よみて、舞台の柱にかきつうとき人にしありければ、役者。盃、さ、せてもどして、そのむかしかぶき見る人、太夫に出さんとて、さしきへよびぬいかしかぶき見る人、太夫にはは、

きて見ればたえなる君か雪おどりけさす。

らにあぢはひて。 此歌は、あるが中におもしろければ、心とゞめてよまず。は此歌は、あるが中におもしろければ、心とゞめてよまず。は

(●第四十五段→該当本文なし。)

●第四十六段

るれば、わすれぬべき物にこそあめれといへりければ、よみにけんといたく思ひわびてなん、侍る。世中の人の心はめがなしとおもひて別れにけり。月日へて、おこせたる文にあさなしとおもひて別れにけり。月日へて、おこせたる文にあさかいとかぶき子いとうるはしき知音ありけり。かた時ざらずむかしかぶき子いとうるはしき知音ありけり。かた時ざらず

がるともおもほえなくにわすらる ときしなければおもかけにたつ」(上廾四才)

挿絵 (上卅四ウ

第四十七段

むかしねんころにいかでと思ふ野郎ありけり。されど、此男 をあだなりときゝて、 おふちやくの心あまたに見えければ つれなさのみまさりつゝ、 いへる。

おもへどえこそたのまざりけ ħ

返

おふちやくと名にこそたてれ立とても つゐにおふちやくなきてふ物を」(上卅五才)

挿絵 野良仁勢上終」」(上卅五ウ)

【登場役者および人物名索引】

あ…吾妻 ・()は段数、[]は本文内での別称を示す。 [あずま] (二十二) (※松本吾妻か。)、井筒屋久兵衛

塩屋(十二・三十三)、塩屋九左衛門[九左衛門/九左](五・ 之介/とらのすけ](十四・二十)、岩井雅楽介 [岩井](二十一)、 上松小ざらし (九)、か…こあけの与介 (九)、さ…作松 (十九)、 (二十三)(※小篠久兵衛か。)、岩崎金作 (六)、伊藤虎の介 [虎

井しづまか。)、荘司いせみこ (三十九)、千之丞 (九) (※玉川 九・三十九)、塩屋九郎右衛門 [九郎右衛門] 、(三)、品之介 (八) (※小嶋品之介か。)、しつま[しづま](七・八・三十九)(※平

> 花崎小太夫(五)、初太夫(三十三)(※藤林初太夫か。)、武左 玉之丞か。)、寺田左伝次(十三)、な…中川長太夫(二)、は…

千之丞か。)、た…竹長主水 (十七)、玉之丞 (二十一) (※吉田

丞(三)、松本名左衛門兼治卿[名左衛門/松本名左衛門](六・ 衛門(五)(※藤川武左衛門か。)、ま…又二良(一)、松嶋作之

とやいてき [いてき] (三十九)、や…山田七郎右衛門 九・十六)、水のこゑの市之丞(九)(※坂田市之丞か。)、

七 みな 郎

右衛門』(十九)、ら…六三良 四

(付記) 之島図書館、 翻刻および図版の掲載をご許可下さった大阪府立 本稿執筆にあたり、ご教示頂いた廣瀬千

四年度秋学期・二〇一五年度春学期に実施した佛教大 紗子先生に感謝申し上げます。また、本稿は、二〇一

学大学院演習での輪読の成果である。 のご協力に感謝申し上げます。

受講生の皆さん

はまだ・やすひこ 佛教大学講師

— 101 —